

◀書 評▶

松本有一著 『スラ ッ フ ァ 体 系 研 究 序 説』

（関西学院大学研究叢書第60編，ミネルヴァ書房，
1989年，vi+231 ページ）

赤 堀 多 美 雄

I

ピエロ・スラッファ（Piero Sraffa, 1898-1983）は特異な経済学者である。スラッファの著作は決して数多いとはいえないが、そのいずれもが透徹した論理でもって正統派経済理論の欠陥を剔出し、経済理論の枠組を根底から組み替えることにより経済理論の研究に新たな方向を切拓いたものである。スラッファが経済学の歴史において極めて大きな貢献をしたことについては、異論の余地は無いであろう。にもかかわらず、スラッファの経済理論の全体像についてはこれまで纏まった形で評価を定めるには至っていない。スラッファの著作が多くないことに加えて、彼の経済理論の集大成である『商品による商品の生産——経済理論批判序説』が小さな書物であり、極めて簡潔に最小限のことしか書かれておらず、それゆえに難解であるためである。（スラッファがこの書物をめぐる議論に対して寡黙であったのは、ひとつにはそれらの議論がこの書物の内容を十分に理解したものではないとスラッファ自身がみていたためではないかと思われる。）

本書は、著者の長年の研究の蓄積にもとづいてスラッファの経済理論体系をその基本的な枠組で整理し、様々な論点について解釈と評価を与えようとする意欲的な著作である。全体の構成は序章と第Ⅰ部「スラッファ体系の学説史的背景」、第Ⅱ部「『商品による商品の生産』研究」、第Ⅲ部「『商品による商品の生産』をめぐる論争」の3つの部分からなっている。「スラッファ体系の中心は生産価格の理論にある」（205ページ）とする著者にとって中心となるのは、第Ⅱ部の第5章「スラッファ体系の解釈と評価」および第Ⅲ部の第6章「マルクス経済学からみたスラッファ体系」、第7章「標準商品・標準体系の意義」の3つの章である。

II

序章「スラッファ体系をめぐる問題状況——本書の課題」では、各国におけるスラッファ研究の状況が紹介されたあと、本書を構成する各部各章の課題と意図が説明される。

第Ⅰ部「スラッファ体系の学説史的背景」は2つの章から成っている。第1章「リカードの

『価値と分配の理論』では、「スラッファ体系の評価の仕方がスラッファのリカード解釈とも関係する」（12ページ）として、スラッファのリカード解釈を検討しつつリカード理論の形成史が辿られたのち、リカードを悩まし続けた不変の価値尺度論に一定の解決を与えるものとして、『商品による商品の生産』の意義が確認される。

続く第3章「マルクスの価値論・生産価格論」では、マルクスの「価値の生産価格への転化」論と転形問題がとりあげられ、マルクスとは異なった枠組で生産価格論が説かれなければならないと結論づけられる。このことは後に明らかにされる「スラッファの行なった仕事は『価値の生産価格への転化』ではなく、それとは異なる生産価格の決定である」（91ページ）という著者の主張の伏線となっている。

第Ⅱ部はその表題の通り『商品による商品の生産』の研究』である。先づ第3章「スラッファ体系の形成」では、『商品による商品の生産』の形成過程を辿ることにより、スラッファ体系すなわち『商品による商品の生産』に表わされるスラッファの理論体系の中心が『商品による商品の生産』の「第1章と第2章、そして広くとって第3章までに含まれる」（46ページ）という著者の見解が述べられる。

第4章「スラッファ体系の基本構造」では、『商品による商品の生産』のうちの第1部「単一生産物産業と流動資本」の内容が解明整理され検討される。少し詳しくみておこう。

第1節「はじめに」に続く第2節「スラッファ体系の前提」で、「限界主義的な理論が演ずる役割がない、そういう舞台装置のうえにスラッファの理論体系は立っている」（59ページ）ことを確認したのち、第3節「スラッファの生産体系——基本モデル」では『商品による商品の生産』の第1章「生産のための生産」と第2章「剰余をふくむ生産」の内容が検討される。その結果、スラッファ体系が（国民所得を1として、つまり国民純生産物を価値尺度として）価格と利潤率および賃金率を変数とする自由度1の方程式体系で表わされる生産価格体系であることが示される。

したがって、スラッファの生産価格体系では変数の1つが体系の外部から与えられるならば残りの変数が決定されることになるのであるが、スラッファは分配関係は生産の体系の外部で決定されると考え、『商品による商品の生産』の第3章「生産手段に対する労働の割合」で、生産方法が不変のもとで賃金率の変化が利潤率ならびに個々の商品の価格の変化に与える効果を考察している。第4節「分配関係と価格」はそこでのスラッファの論述の検討に充てられている。つまり、賃金率の変化による商品の価格の変化は、その商品が生産される産業の生産手段に対する労働の比率に依存するのみならず、さらにそれらの生産手段を生産する産業の生産手段と労働の比率や、そのような生産手段の生産手段を生産する産業の生産手段と労働の比率にも依存すること、その商品の生産の「継続的な層」とでもいべきものに依存することが述べられる。

第5節および第6節は『商品による商品の生産』の第4章「標準商品」の中の問題をとりあ

げている。第5節「標準商品・標準体系の構成」では、賃金率（したがって分配関係）の変化に対して価格が不変にとどまる商品が考察される。というのは、もしそのような商品を価格標準（ニューメレル）とするならば、価格の変動は専ら測定されている商品の特性によるものであることが明らかになるからである。このような性質をもつ商品こそリカードが探究し続けた不変の価値尺度である。そして、第4節での議論から、それはその商品の生産の「継続的な層」において生産手段と労働の同じ割合が繰返される商品なのである。しかし、スラッファは不変の価値尺度となりうるそのような単一の商品を見出すことは殆ど不可能であるとして、1つの合成商品を導き出す。つまり、それ自身の生産手段の総量と同じ割合で合成された同じ商品からなるような合成商品すなわち標準商品である。このような合成商品は、現実の生産体系の各生産部門をそれぞれ拡大もしくは縮小することにより導出することができる。標準商品を生産する経済体系が標準体系である。言うまでもなく標準体系の純生産物も標準商品と同じ構成である。そして、総労働量が現実の体系の総労働量と等しい標準体系の純生産物が標準生産物の単位とされ、標準純生産物ないしは標準国民所得とよばれるのである。

それでは標準純生産物をニューメレルとすることはどのようなメリットがあるのであろうか。第6節「価値尺度としての標準商品」の論点がこれである。標準体系では標準純生産物が利潤と賃金に分配されるが、賃金が標準商品で支払われるときには生産手段・生産物・利潤・賃金のいずれもが標準商品からなるから、

$$\begin{aligned} \text{利潤率} &= \text{利潤総量} \div \text{生産手段総量} = (\text{標準純生産物} - \text{総賃金}) \div \text{生産手段総量} \\ &= \frac{\text{標準純生産物}}{\text{生産手段総量}} \left(1 - \frac{\text{総賃金}}{\text{標準純生産物}} \right) \end{aligned}$$

と書くことができる。つまり標準体系においては、利潤率は諸商品の価格とは無関係にそれらの諸商品の数量間の比として表わされるのである。この関係は、賃金として標準商品そのものが支払われなくとも、賃金が標準商品で測定されれば成立するのである。しかも、標準体系は現実の体系と数学的に同値なのである。したがって、標準商品をニューメレルとすることによって両体系の賃金率・利潤率および諸価格は同一のものになるから、標準体系において商品の数量間の比率として求められた同じ利潤率が、現実の体系においても集計的な価格の比率から得られることになるのである。

以上でスラッファ体系の提示を終えた後、補足的に3つの節が加えられている。

第7節「基礎的生産物と非基礎的生産物」では、諸価格と利潤率および賃金率が直接あるいは間接に他のすべての商品の生産にはいる基礎的生産物だけからなる生産体系で決定され、それらの価格・利潤率・賃金率が非基礎的生産物の生産部門に適用されるという『商品による商品の生産』の第2章第6節での議論が、ボルトケヴィッチやリカードの議論との対比において述べられる。

第8節「小体系について」では、『商品による商品の生産』の「付録A『小体系』について」

で述べられていることが明確な形で説き明される。小体系とは現実の生産体系をその各部門を拡大もしくは縮小することによってある1つの商品だけが純生産物として生産されるように変形したものであり、商品の種類だけの小体系をつくることができる。したがって、小体系では生産体系の総労働が1つの商品に転化しているとみることができるから、「各小体系の全労働量を当該小体系の純生産物で除すれば、各商品の単位当たり投下労働量がわかるのである。これは、もとの体系ではインプリシットにしか現われない各商品への直接・間接の投下労働量にも当然のことながら等しくなる」(79ページ)。しかしながら、それぞれの相対価格は必ずしもその商品に直接・間接に投下された労働量に比例する訳ではない。スラッファ体系では相対価格は分配関係にも依存するのである。

最後に「小体系についての補論」では、「現実の体系から小体系が一般的に導かれること、および通常投下労働量算出方程式から算出された各商品の投下労働量と各小体系で算出された投下労働量とが等しくなることが示される」(80ページ)。

第5章「スラッファ体系の解釈と評価」は6つの節からなる。そのうち第5節「標準商品と支配労働」は『商品による商品の生産』の第5章第43節の検討を中心とするものであり、第6節「日付のある労働量への還元」は『商品による商品の生産』の第6章を整理したものである。スラッファ体系の中心が『商品による商品の生産』の第1章と第2章、そして広くとって第3章までに含まれるとする著者の立場から問題となるのは、第2節から第4節までの3つの節である。

第2節「スラッファの想定する経済体系」では、スラッファが生産規模の変化のない経済体系、単純再生産を想定していることの意味が、1つには限界主義批判にあり、また1つには特定の収穫法則の仮定を排除することにあることが述べられる。

第3節「生産価格論としてのスラッファ体系」は著者のスラッファ理解を端的に表明している箇所である。著者によれば「与えられた経済状態において、その経済がくり返し行なわれるためにはその経済の諸生産物のあいだにどのような交換関係がなりたっていなければならないか。これを説明することがまさにスラッファの課題であって、そこには需要と供給の相互作用といったものは何ら関係がないのである」(92ページ)。そして需要・供給と関係なく決る交換関係＝価格とは、各生産部門に均等利潤率を保証する価格すなわち生産価格なのである。著者は生産価格論としてスラッファ体系を位置づけるのであるが、その意義は、価値ではなく生産の物的な諸関係を所与とすることによって生産価格論の対象が明確になること、マルクスの場合に欠落していた費用価格の生産価格化の問題を解決していること、非基礎的生産物が価格および利潤率の決定に何ら関与しないこと、生産価格が分配関係から独立ではないことを示したこと、にあるとしている。

この最後の点はスラッファが賃金を後払いとしたことに関係している。次の第4節「賃金の取り扱い」は、スラッファの賃金の取扱いについての検討である。

第Ⅲ部「『商品による商品の生産』をめぐる論争」は3つの章と2つの補論および終章からなっている。第6章「マルクス経済学からみたスラッファの体系」はスラッファ体系とマルクス経済学との関連についてのいくつかの論争・批判についての考察である。マルクスの理論とスラッファの理論とは相容れないものなのか、それとも継承関係にあるのか、前者に後者は組込まれるのか、あるいは相互に補完的であるのか、転形問題がスラッファによって解決されたのか否か、特に標準体系・標準商品が価値の生産価格への転化に対してもつ意味は何か、スラッファ体系において搾取理論があるのか、スラッファ体系は労働価値説と両立しうるのか、こういった論点がド・ブリュノフとイートウェルとの論争の検討を通して考察され、カトラー、ヒンデス、ハースト、フセインのスラッファ理解を批判することによって著者の生産価格論としてのスラッファ体系理解が補足されることになる。そして最後に、価値概念を再定立したうえで価値と生産価格との関係を問直すときにはスラッファの理論が有効になるのではないかという著者の見解が示される。

第7章「標準商品・標準体系の意義」では、先づ *History of political Economy* (Vol. 18, No. 3, Fall 1986) 誌上での P. L. ポルタの見解をめぐる論争がとりあげられる。この章の表題との関連で重要なのは、価値体系と生産価格体系を結ぶのが平均的な生産条件であり、この平均的な生産条件が標準体系でありそれにより生産される平均商品が標準商品であるとみることにより、標準体系では総計一致命題が成立することから、スラッファは価値の生産価格への転化論を解決したといえるか否かという論点である。この論点は最後の2つの節、第4節および第5節であらためてとりあげられ、著者の見解もそこで明らかにされる。

第4節「標準体系と転化問題(1)——搾取率と利潤率」をみてゆこう。搾取率＝総利潤÷総賃金であるから、標準体系においては

$$\text{搾取率} = \frac{\text{標準純生産物} - \text{標準商品表示の賃金}}{\text{標準商品表示の賃金}}$$

である。また標準体系では 利潤率＝標準比率(1－賃金率) という関係が成立するから、

$$\text{利潤率} = \text{標準比率} \cdot \frac{\text{標準体系における搾取率}}{1 + \text{標準体系における搾取率}}$$

という形で利潤率と搾取率とをリンクさせることができる。標準体系を媒介することにより価値と価格との間とのリンクが可能となり、価値の生産価格への転化を説くことができるというのがイートウェルと菱山教授の議論である。

ところで現実の体系における搾取率は標準商品を尺度として、

$$\text{搾取率} = \frac{\text{標準商品表示の現実体系の純生産物} - \text{標準商品表示の賃金}}{\text{標準商品表示の賃金}}$$

と定義される。このように定義された搾取率こそが、本来現実体系において価値と価格をリンクさせる役割を担うべきものである。問題はこの現実体系の標準商品表示の搾取率が標準体系での搾取率とは必ずしも一致しないことにある。そのために現実体系では

$$\text{利潤率} = \text{標準比率} \cdot \frac{\text{標準体系における搾取率}}{1 + \text{標準体系における搾取率}}$$

という関係は必ずしも成立しない。したがって価値の生産価格への転化問題を解決することにはならないのである。さらに、搾取率はいずれも標準商品をニューメレルとする価格のタームで定義されているのであるから、たとえ

$$\text{利潤率} = \text{標準比率} \cdot \frac{\text{標準体系における搾取率}}{1 + \text{標準体系における搾取率}}$$

という関係が成立するとしても、この関係式でもって価値と価格のリンクをいうことはできないのである。そもそもスラッファ体系では価格は価値に何ら依存することなしに決定されるのであり、平均利潤率も総剰余価値に依存してその値が決定されるというようになっていないのであるから、標準体系は価値の生産価格への転化論には何ら解決を与えることができないのである。以上が著者の主張である。

第5節「標準体系と転化問題(2)——総計一致命題」では、スラッファの標準体系を利用することによって総計一致命題の成立を証明しようとする議論が検討される。そこでもまた、価値にまったく依存しない価格決定論であるスラッファ体系を価値と価格との関係を論ずる問題に適用することが無意味であることが指摘されている。要するに、搾取率と利潤率とのリンクの点においても総計一致命題についても、標準商品・標準体系によっては価値の生産価格への転化問題を解決することはできないというのが著者の主張なのである。

第8章「スラッファ体系と収穫法則」ではスラッファ体系が規模に関する収穫不変の法則を前提としなければ成立しえないのか否かという論点が扱われ、スラッファ体系はいかなる収穫法則をも前提としていないことが論じられている。

補論1「ステードマンのマルクス・スラッファ論」は、スラッファ理論の枠組をもってマルクス経済学の価値・価格および利潤率に関する議論に代置させようとするステードマン(Ian Steedman)の *Marx after Sraffa* (1977) での議論を検討したものである。ステードマンの立場はスラッファ体系を生産価格論としてみる著者の立場と基本的に同じであり、価値法則の理解の仕方や標準商品・標準体系に対する評価が示されていないことなどを除けば、著者はステードマンを肯定的に評価している。

補論2「リキテンスタインのスラッファ解釈」はリキテンスタインのスラッファ理解に対する批判である。

III

前節で終章「まとめと残された課題」を除いて本書の各章の内容を概観した。本節では筆者自身の考えを交えて若干気づいた点について述べてみたい。

著者は「マルクスが意識的にとりあげ、しかし十全に解決できなかった生産価格の問題がスラッファによって解決されたと考えている。……スラッファの行なった仕事は『価値の生産価

格への転化』ではなく、それと異なる生産価格の決定である」(91ページ)と述べている。マルクスが価値を前提にして生産価格を説こうとしたのに対し、スラッファは生産の物的・技術的諸条件から直接に生産価格を導いているのであるが、そうすることによって生産価格は価値から切離され「転化問題」から解放される点で生産価格論としてのスラッファ体系を評価しているようである。しかしながら、小体系はまさに労働のみが価値を生み出すことを示しており労働価値説そのものである。この意味でスラッファ体系においても価値と生産価格との関連があらためて問題とされなければならないのではなからうか。

著者は現実体系では価値と生産価格は個々の商品についても総計でみても一般的には異なることから「価値の生産価格への転化」論は誤りであるとみている。しかしそうではない。マルクスも言うように、生産価格は需要と供給により決定される市場価格の変動の中心なのであり、必ずしも現実の市場で成立するものではない。その意味で生産価格は需要・供給とは関係なく決定されるのであるから、いわば現実の生産体系を平均化した生産体系において価値と生産価格との関連を論じればよいのである。現実体系において総計一致命題が成立しないことは「価値の生産価格への転化」論の難点ではないのである。

この点に関してもう一つ。生産価格に等しい市場価格が現実で成立するとすれば、それを成立させる需要と供給をもたらず物的・技術的な生産体系が存在するはずである。そのような生産体系こそが標準体系であると筆者は考えている。誤解を恐れずに言うならば、標準体系のものでしか価値は生産価格に転化しないのである。著者とは反対に、標準体系は価値の生産価格への転化問題において極めて重要な役割を果たすというのが筆者の考えである。

スラッファ体系では、ニューメレルが同一であるかぎりいかなる「現実体系」でも分配関係に対応した同一の生産価格が得られる。このことは生産体系のスケールや生産物の量的構成とは無関係に、生産価格が専ら技術的に決定されることを意味している。生産価格が需要・供給とは無関係に決るというのは、このことを言っているのである。他方、「現実体系」で現実で成立する市場価格はこのような生産価格ではない。生産価格論としてのスラッファ体系においては「現実体系」は現実の体系の価格を生産価格で置換えたものになっている。このような経済体系は一体いかなる意味をもつのだろうか。

IV

以上、筆者にとって若干気になる点はあるけれども、本書は著者の長年の真摯な研究の結果生れた好著である。十分な文献の渉猟をもとに論争が手際よく纏められていることは、論点が明確であることと相俟って、本書の論述を刺戟に富んだものになっている。また、スラッファ体系が精確に辿られていることは本書に『商品による商品の生産』の解説書としての価値をも付与している。

ありうべき誤解・誤読については御寛恕を乞いたい。

